法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-13

<文献紹介>富田啓介 著 「里山の『人の気配』を追って ： 雑木林・湧水湿地・ため池の環境学」

HOSODA, Hiroshi / 細田, 浩

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
49
(開始ページ / Start Page)
93
(終了ページ / End Page)
94
(発行年 / Year)
2017-03-17

【文献紹介】

富田 啓介 著（2015 年 7 月）
「里山の『人の気配』を追って　── 雑木林・湧水湿地・ため池の環境学 ──」

花伝社，281p，1700 円（＋税）

本著の中でも紹介されているように，近年里山についての本は数多く出版されている．本著では，里山の本質は「人とのかかわり」である，ととらえ，失われつつある，（あるいは失われてしまった）里山の中に人々の関わりの気配を探し求めて行く．そこでたどりついたのが題名にある「人の気配」なのである．「人の気配を追って」とは，景観の中に消えかかっている人の関わり方の跡を探し，追い求めるという意味だろう．「自然を守れ」と言うのではない．里地里山にかつてあった，人が土地に働きかけ，その地域の中で生き，暮らしていた景観・生活・姿というものを里山の本質として探し求めて行こうというのである．里地里山は２つの意味で失われた．その１つは，生活の中で生きていた，ため池や，雑木林が使われなくなり，消滅し，自然の中に飲み込まれてしまった例であり，その２は土地を大きく削り，圃場整備や宅地開発をすることによって，かつての地形や，無数にあったため池が跡形もなく無くなったためである．

著者は愛知県知多半島に生まれ，小・中・高・大学をとおして地域のため池，雑木林，そこに生きる植物，動物に親しんで育ってきた．シラタマホシクサを探すエピソードを通して，知多半島地域の自然の情景や，少年の生き方が生き生きと描かれている．若いナチュラリストの誕生である．そのきっかけの一つとなっているのは，身近に経験豊かなナチュラリストの鈴木樹雄氏がいたことによるのであろう．そして少年の前に，次々と彼を活躍させるべく，たくさんの人が現れてくる．このように人とのかかわりが豊かであるのは，著者のお人柄でもあろう．文章からも人に接する温かみが感じとれ，しかも叙景の表現は詩的である．著者は昨年度まで法政大学文学部地理学科の助教，今年度から愛知学院大学に専任講師として勤務されている．この本を読んだ若者は，きっとこのような先生と出会いたいと思うのではないだろうか．

あとがきの中で著者は「私自身が実際に見聞きし，調査したことを中心にまとめることにした．…結果，取り上げる地域は限られてしまった…」と述べている．それが限定的な地域の問題に限られないで，東京の近郊でも，北海道でも，沖縄でも，そして他のアジア，アフリカの国々でも，同様のことが起こってきたのではないか，と読者に思いつかせるところに，貴重な含意がある．まさにローカルな活動をすることによって，グローバルな問題に直結する，月並みな表現だが“Act locally, think globally”という標語を具現している著作である．以下，章・節を追って内容を紹介する．

第１章　里山へようこそ
　　1　谷戸という桃源郷
　　2　シラタマホシクサの咲く湿地
　　3　光るため池

著者の体験に基づく，愛知県知多半島南部の身近な自然，すなわち低い丘陵とその間にある谷地（谷戸・谷津）と，そこでの貴重な植物との出会いが語られる．尾張地方ではこの谷地のことを○○ハザマ（桶狭間などが例）と呼ぶらしい．モウセンゴケの生える湿地を，ハルリンドウや，シラタマホシクサを求めて，自転車をこぐ少年の姿が彷彿とする．農機具小屋や，使われなくなった田舟などを見て，里地里山での「人の気配」に気づく．シラタマホシクサを求めて壱町田湿田を歩く．それは時間と空間との戦いである．やっと出逢ったシラタマホシクサは「はっと息をのむ美しさ」である．それは湿地の「星空」のようであると表現している．シラタマホシクサは幻の花として次第に人気となり，1990 年代，景観保護のため，一般公開日をもうけるというほどの活況となる．著者はその当時高校生ながら，すでに現地ガイドとなっている．早熟の少年である．夕焼けの谷地田，あるいは日が暮れて真っ暗闇の谷地は里の民話の舞台でもある．真っ暗な谷地を実際に体験した者でなければ書けない文章である．

第２章　里山とはどんなところ
　　1　自然と人工の間
　　2　歴史が里山を創った
　　3　語りからみる里山
　　4　高度経済成長が里山にもたらしたもの

里山という表題としては，この章が鍵となる部分である．里山とは何かという定義が述べられる．「里山」ブームで多くの本も出ているが，ここで里山とは，また里地とは何かと，きちんと定義する．著者は，「里山は自然と人工の中間にある地域である」という．狭義の「里山」は薪炭林，あるいは採草地，すきこみ肥料を採るところで，身近な山や，丘陵地である．しかし，広義の「里山」は集落・鎮守の森・畑・水田・ため池などの灌漑施設も含めたものであるという定義が卓見である．これは里地や里山をひとつの総合的な結合したシステムの景観地域としてとらえる，ということであろう．「里山」と「里地里山」を定義した後は，総合的な地域構成として，とらえた空間を指して「里地里山」という言葉を使っている．もちろん単なる里山というより，こちらのほうがより重要であろう．狭義の里山は国土の4割を占めている．植生帯の異なる地域によって，ミズナラ，コナラ，アカマツ，シイ・カシの萌芽林，などがそれぞれに優占する．植物社会学的には中規模攪乱林と言われるものである．この里山は著者いわく，「中途半端な」林地であるが，そこにこそ生物は多様で，絶滅危惧種なども多い．その理由は，森林の攪乱によって処女地となった場所にのみ生息できる多数のパイオニア種が生育しているからである．従って，「人の（働きかけの）気配」こそが豊かな自然を保障するということになる．そこに，この本の重要な主張がある．人の里山への働きかけには，歴史的に，さまざまな形態があり，窯業や，新田の開発，ため池，樹木採取，採草などが挙げられる．評者は関東地方の里山でも，マツの落葉をかくことを知っていたが，それを「ゴーカキ」という言葉であるとは知らなかった．

そして，高度成長期，もはや里山が不要と認識され，住宅開発や，圃場整備によって失われてゆくのは1950～60年代の高度成長期，薪炭が燃料として使われなくなったからである．急速な日本の近代との決別期である．そこからもたらされた世界はいかなるものであったか．

第3章　里山の異空間・湧水湿地

1　里山の中にある湿地

2　記憶の中のシラタマホシクサ

3　湧水湿地の水で育てたうまい米

4　湧水湿地と人の関わり

この章では湧水湿地の大切さが強調されている．湿地の定義は広く，淡水，塩水を問わず，沼沢地，湿原，泥炭地，浅い海などを含む浅い水域である．ここでは，谷地に湧く湧水と湿地の生態が詳しく語られる．小さな湧水湿地はそこここに，もっとたくさん存在していた．著者の研究で明らかにされた湿地の生態系はデリケートである．著者は足で歩いて，ローカルな失われた湿地の分布図を描いてゆく．その作業は並大抵ではない．シラタマホシクサの分布は減少し，その生存が健全な環境の指標であるという．著者が関わった矢並湿地の保存を含む「東海丘陵湧水湿地群」が，やがてラムサール条約に登録されるまでの苦労もうかがえる．

第4章　さまざまな顔をもつため池

1　水路の源にはため池がある

2　原風景としてのため池

3　ため池はどうして消えたのか

著者が表題につけた「里山の」が，実際には「里地里山の」すなわち，その地域全体の自然と人の関わりを扱おうとしているところの意図は明白である．本著において，実はため池の研究が圧巻である．著者は長年この研究をしていたのだな，とわかるのである．時間をかけた研究の厚みが感じられる．学生時代に愛知県の半田市，阿久比町で，ため池の調査研究をしている．ため池台帳というものが残されており，実際にため池の存在の有無を，ひとつひとつ足で歩いて調べた結果，全体の20.6％が消失していることがわかった．苦労して調べたこの研究も，本著のベースとなっている．全国のため池の分布から，民話や雨ごいの話まで力が入っている．評者は一軒の家が複数のため池を所有しており，とりわけ貧しい家のほうが小さなため池を多く所有するという事実に驚いた．

第5章　現代の私たちにとっての里山

1　里山を保全する意味

2　里山とつきあう

最後の章では，里地里山を守ることの意味について問いかける．里地を守るとはどういう意味か，何のために？　生活に必要の無くなった里山を守ることに合理的な意味はあるのか，単なる生物オタクなのか？と，改めて問う．評者自身も文化財審議会などの仕事上，各地各方面で，このような問いに直面するのである．「動物・植物と，人間の生活のどちらが大切なんだ！」などと詰問されることも多い．文化や，美，私たちに，もしも生活必要物だけの未来を残そうとするならば，美しい器も要らぬ．飾る食卓もいらぬ．生きて，寝るだけの空間だけ．衣服は寒さをしのぐだけで良いのか，と問えば，誰も「是」とは言わないにちがいない．便利な生活，それだけでよいのか？　と問えば，「そんな世界はごめんだ．すべての文化は失われる」と，皆さんが答える．ところが自然環境についてだけは「何の役に立つのか」「湿地を残すことに意味があるのか」などと問うのである．まことに愚かであろう．私たちが大切にすべきものは何だったのか．そのことに気づかせてくれる一冊である．とりわけ里地里山に，人の働きかけが大切であること，人が働きかけた所の方が生物が多様であるという，その証明が見事である．また分布から多くの事実がわかる点も評価される．まさしく地理屋の本懐である．中山間地などという，わけのわからないお役所言葉がほとんど使われていないのも心地よい．評者は不勉強で，よくわからない点は，湧水湿地とため池のちがい．それらは別項にしてあるが，そのちがいは何かを，もっと明確にしてもよかったのではないかと思った．　（**細田　浩**）